

也言葦原中國惡神充滿如五月之蠅衆多之意也

〔日本書紀神代〕一書曰中素盞鳴尊乃以天ハエキリ蠅斫之劍斬彼大蛇時斬蛇尾而刃缺見釋

〔源平盛衰記四十四〕神鏡神璽都入并三種寶劍事

十握劍中又ハ蠅斬劍ト云此劍利劍也其刃ノ上ニ居ル蠅ノ不自斬ト云事ナケレバ也見釋

日本

〔枕草子三〕むしは

はへこそにくきもの、うちにいれつべけれ、あいぎやうなく、にくき物は、人々しふかきいつべき物のやうにあらねど、よろづの物に居、かほなどにぬれたるあし、てゐたるなどよ、人の名につきたるは必かたし、

〔異本枕草子〕にくきもの

はへの秋などおほくて、よろづの物にあしはぬれ、つめたくて、かほにもゐあり、いとむづかしうにくし、

〔小夜のねざめ〕はいといふ虫のぬり物などには、こを白くしかけ、白き物には、はこをくろくしかけ侍る、

〔花月草紙四〕とりもちをもて、はへといふ虫をおほくとりたるを、ふとけみきやうとて、目もおよばぬものをみるめがねのあれば、それもてみしに、そのもちにつきたるはへが、にげんとして羽を動かすが、はてはその羽ももちにつきて、うごきえず、かうべうごかして苦しむもあり、又久しくつきしは、飢にのぞみてよはり死するけしきもあり、たゞに羽をならす音のみき、しが、よくみれば、いとかなしきさまなりしとかたるを、さあらんよなど、人のこたへしを、みしとき、しとはいとたがふものぞかし、みしごとくき、給は、さあらんなど、計はいひ給はじ、まいて目の